

《調査報告》

「かねやま『村の肖像』プロジェクト」番外編

『奥会津の冬』を描こう！」報告

田中 一裕（新潟大学）・榎本 千賀子（新潟大学）

このイベントは 2023 年 4 月より、奥会津デジタルアーカイブ準備室長としてデジタルアーカイブ(以下 DA)開設の準備にあたっている新潟大学人文学部榎本千賀子助教が、2023 年 11 月 22 日金山町開発センターで主催した「奥会津の暮らしの記憶について、写真を囲みながら語り合う」ことを目的として企画された。イベント web にはこれまで実施されている「かねやま「村の肖像」プロジェクト」や、新潟大学「にいがた 地域映像アーカイブ」が収集した写真を見ながら、「『奥会津の冬』をテーマに来場者のみなさんと冬の思い出を語り合い」、「奥会津の暮らしの経験を豊富にお持ちの方も、奥会津に育った若者も、奥会津に移住されたばかりの方も、奥会津を遠くから想う方も参加してもらいたい」と紹介されている。地域コミュニティにとって DA をまとめる作業は、単に資料を集めるだけでなく、資料に込められた地域の人々の思いを収集することによって、まさに記録に命を吹き込む作業になりうるものである。今回のイベントに参加し、古い写真を前にかつての思い出を語る地元の人々の姿からは、故郷に対する強い愛情を受け取ることができた。その様子について、当日の写真と、主催者の榎本へのインタビューを交えて報告する。

1. 「奥会津デジタルアーカイブ構想」とは

奥会津 DA 構想とは「奥会津 7 町村が連携し、地域文化資源の集約・公開をおこなう DA を構築・運営する計画」である。この構想は、過疎高齢化と人口減少にともなう奥会津 7 町村の文化遺産マネジメント能力や発信力の低下を、町村間の連携協力によって維持向上させるとともに、町村の枠組みを超えた新たな視座から「奥会津の地域アイデンティティたる「奥会津らしさ」を再検討・確立すること」を目指す奥会津 7 町村のエコ・ミュージアム事業「奥会津ミュージアム」の取り組みのひとつとして位置づけられている。

2023 年度の奥会津 DA 準備室では、2024 年度の奥会津 DA 公開を目指して、表 1 の活動に取り組んできた。

本稿で取り上げるイベントは、これらの取り組みのうち、地域における DA 基本知識や活用法の浸透を目指す「4. DA 公開講座の開催」の一部として開催されたものである。

表 1 DA 準備室の取り組み

1	DA システムの構築
2	DA 公開予定資料のデジタル化・権利処理
3	DA バックヤードとしての 7 町村共同データストレージの構築
4	DA 公開講座の開催

榎本 DA 準備室室長は、「DA 構築のための現状調査として行った各町村に対するヒアリングで、三島町からデジタル化した写真の整理・活用法についての相談がありました。三島町ではすでに昭和初期の乾板写真を 50 枚程度デジタル化しているのですが、内容の詳細はほとんどわからず、今後これをどのように整理・活用してよいか見通しが立たないということでした。

また、昭和村（枚数不明）・只見町（概算で 900 枚程度）にも未整理の乾板写真が保存されていることがわかっています」と、奥会津を記録した多くの過去の写真の存在について明らかにしている。

榎本は、2017 年より 2019 年にかけて金山町教育委員会の非常勤職員として「かねやま「村の肖像」プロジェクト」事業の企画・運営に携わったことをきっかけとして、2023 年 4 月より、奥会津 DA 準備室の室長として只見川電源流域振興協議会配置の地域おこし協力隊の櫻澤孝佑氏および数名の職員とともに DA 開設の準備にあたっている。

2. かねやま「村の肖像」プロジェクトとは

かねやま「村の肖像」プロジェクトとは、地域の人が撮影し、地域の人が保管してきた写真の収集・整理を通して、地域の記憶をたどるコミュニティ・アーカイブ活動であり、その過程にデジタル技術を活か

した、7 町村内におけるデジタルアーカイブ活動の先行例のひとつである。この活動では、過去の写真を見ながら写真の状況や内容・関係者などを語り合うワークショップを金山町内の各地区で繰り返し、写真についての情報を地域の方から提供してもらうことで、写真を整理することを続けてきた。この事業の成果は、その概要が写真集（金山町教育委員会・榎本千賀子編著『山のさざめき 川のとどろき かねやま「村の肖像」プロジェクト』金山町教育委員会、2019年）として刊行されるとともに、約1万枚の写真が「にいがた地域映像アーカイブデータベース」を通じて収録・公開されている。

3. 「かねやま「村の肖像」プロジェクト」番外編「奥会津の冬」を描こう！」イベント

(1) イベント概要

今回のイベントは、かねやま「村の肖像」プロジェクトで実施したワークショップの方法を、金山町を越えて奥会津7町村と共有・体験してもらう機会を提供することを目的に開催された。また、このイベントの開催と同時に、DAの構築に向けてオンライン上での活動へ広げる試みを企画し、SNSでの投稿の呼びかけや、ホワイトボードアプリケーションを用いたリアルタイムでの会場での情報の整理を試みた。

今回のイベントの中心的な参加者は、奥会津ミュージアムおよび奥会津DAの活動に参加する7町村の文化施設および教育委員会関係者で、以下の経歴をもつ方々であった。また、この表に加えて、イベントスタッフとして金山町教育委員会職員、只見川電源流域協議会職員が参加した。

イベントの大まかな進行は以下のとおりである。まず、イベント開始後の約30分間は、会場に用意したプリントアウトによる写真展示を参加者が自由に閲覧する時間とした。その後、会場での自由な会話が落ち着いたところで、榎本がファシリテーターとなり、1時間程度をかけて、事前に用意したトピック（冬の仕事・冬の暮らしを彩る・冬の暮らしを守る）ごとに写真を取り上げ、参加者同士でさらに写真の思い出について語り合うとともに、参加者に質問を投げかけながら、さらに写真について語り合うとともに、参加者が当日会場に持参した写真の共有を行った。最後に、ワークショップの開催方法について、会場から質問を受ける時間を約30分間設けた。イベント中に参加者が写真について語った思い出は、会場に配置したスタッフ（只

見川電源流域協議会職員）が付箋およびホワイトボードアプリケーション上に記録した。

表2 参加者所属と詳細

	所属	詳細
1	金山町地域おこし協力隊（金山町出身・Uターン者）	以前より「村の肖像」について興味があり参加。過去の「村の肖像」イベントに興味を持っていたが遠方に居住のため参加できず、今回が初めての参加。
2	地元出版社役員（当日、写真を持参）	奥会津書房代表（三島町の出版社）として雑誌『会津学』、子どもたちの聞き書き作文集などの出版に携わり、奥会津ミュージアムにもオブザーバーとして参加。
3	金山町公式 Facebook 担当者（NPO 団体職員）	過去の「村の肖像」協力者であり、今回のイベントの広報にも協力。
4	新潟大学大学院生（民俗学専攻）	金山町で民俗調査中の大学院生
5	柳津町教育委員会職員	奥会津ミュージアム担当者
6	柳津町斎藤清美術館学芸員	奥会津ミュージアム担当者
7	昭和村からむし工芸博物館学芸員	奥会津ミュージアム担当者

(2) イベントの目的と成果

イベントの目的と成果について、榎本にインタビューを実施した。

田中：今回のイベントに至る経緯について教えてください。

榎本：今年度の準備室では、DAに関する議論をスムーズにするために、DAを議論する上で必要な基本知識を関係者間および地域住民と共有するための「公開講座」をこれまでに2回開催してきました。今回のイベントはこの公開講座から派生したイベントです。6月に行った第1回目の公開講座において、講師の平賀研也さん（元県立長野図書館館長）より、「地域にDAを根付かせるためには『身近な地域資料の活用』『市民が記録を《ジブンゴト》と実感し参加すること』が重要です」とお話しいただきました。この講座において、平賀さんが身近な地域資料の一例として出されたのが、写真資料でした。

また、これとは別に、9月にDA構築のための現状調査として行った各町村のヒアリングでは、三島町からデジタル化した写真の整理・活用法についての相談がありました。三島町ではすでに昭和初期の乾板写真

ネガ原版を 50 枚程度デジタル化し、画像はいつでも使える状態になっているのですが、いつ・どこで・なにを写したのかといった内容の詳細はほとんどわからず、今後これをどのように整理・活用してよいか見通しが立たないということでした。また、昭和村（枚数不明）・只見町（概算で 900 枚程度）にも未整理の乾板写真が保存されていることがわかっています。

ビジュアルな資料である写真は、文書資料等に比べると、専門的な訓練を積まなくとも、内容をある程度理解することができるという点で、間口の広い資料です。また、平賀さんが指摘したように、多くの家庭に保存されており、地域の人々が自身の手で地域の歴史を伝えるものであるという点で、身近な資料でもあります。しかし一方で、写真を専門としない多くの博物館・資料館学芸員にとって写真は、資料の記録メディアや参考資料として扱った経験は多くても、それ自体を資料として扱った経験の少ない、周辺的な資料でもあります。

以上のような過去の公開講座の内容と地域資料の現状を踏まえて、準備室では写真という間口が広く身近な地域資料を、私自身が金山で継続してきた事業の経験を活かしながら、DA の活動と繋げつつ、奥会津全体で整理・活用していく方法を検討してみようということになりました。奥会津 DA 全体では、写真に限らず広く地域資料を扱う予定ですが、今回は今後 DA が扱う可能性のある様々な資料のなかから、間口が広く身近な資料であり、地域内の関係者が取り扱った経験の少ない資料を、地域の先行例に即して取り上げたということです。

また、このイベントの開催を期に、DA の構築に向けて、今後はオンライン上での活動にも広げてゆくための試みをおこないましようということで、SNS での投稿の呼びかけや、ホワイトボードアプリケーションを用いたリアルタイムでの会場での情報の整理をおこないました。こちらについては、十分な準備ができていたとは言えない状況ではあったのですが、まずはできる限りの実験をして次回以降に役立てていこうということになりました。

田中：今回のイベントの目的について教えてください。

榎本：今回のイベントは、主にふたつの目的から開催しました。一つは、奥会津 7 町村の担当者間で、金山町というひとつの町で実践してきた(かねやま「村の肖像」プロジェクト)という写真資料の整理方法や地域内での活用方法を共有すること。もう一つは、来

年度の奥会津ミュージアム連携事業として予定されている展覧会のテーマ「奥会津の冬」を軸に、来場者の皆さんと奥会津の暮らしの記憶を振り返り・記録することです。一般向け広報では、後者の目的に沿って、今回のイベントを次のように紹介しています。

このイベントでは、写真という身近な資料を用いて、来場者の皆さんと奥会津の暮らしの記憶を振り返り・記録することを試みます。ご来場のみなさんも、会場に展示した写真を見て気づいたことや思い出したことがあれば、ぜひ私達に教えてください。

そして、「来場者のみなさんをお願いしたいこと」として、以下の 2 点を挙げています。

<1. 写真を見ておしゃべりする>写真に関連した思い出や、写真についての疑問・質問など、ほかの来場者やスタッフと、自由におしゃべりしてみてください。スタッフは会場でのみなさんのお話を記録します。もし、記録に残してほしくない内容があれば、遠慮なくお申し付け下さい。

<2. 写真にコメントを追加する>会場に用意したペンと付箋を使ってコメントを記し、関連する写真に貼り付けてください。感想・疑問・質問・自分自身の思い出など、内容はどんなものでも構いません。

*なお、本日の会場で皆さんからいただいたお話やコメントは、後日編集を加えて「奥会津ミュージアム Web 版」(<https://okuaizu.design/>) に公開する予定です。

このような内容で、広報をおこなっています。また、写真の会場への持ち込みを歓迎することも示しています。

田中：今回のイベント実施を振り返って、いかがだったでしょうか

榎本：今回のイベントの主たる目的であった 7 町村との方法共有については、一定効果があったと評価しています。会場で資料収集からイベント準備、聞き取りの方法など、開催の各段階に対して、多岐に渡る質問が出たのは、参加した文化施設の担当者が高い関心を持って参加してくれたからだと思っております。また、担当者自身が写真を前に語り合うことで盛り上がり、このイベントを自ら楽しんでくれたことは大きいと思っています。

一方で、今回のイベントは、開催タイミングが金山町議会選挙と被ってしまったことに加えて、これまで

の「村の肖像」では必ず実施してきた写真を用いたビジュアルな広報を行わず、文字情報のみによる広報誌上での告知を主な広報手段としたことが影響し、住民の方の参加がほとんどありませんでした。他町村の文化担当者に、町民参加時の盛り上がりや熱意を知ってもらいたかったのですが、これはとても残念なことでした。開催地となった金山町の様々な事情に合わせて決めた日程と広報方法ではあるのですが、準備室側でもっと工夫した提案を積極的にできなかったか反省しています。

また、金山町は学芸員がおらず、数年で交代する上に教育委員会の様々な業務を兼務する1名の文化財担当者が置かれているのみです。そうした状況のなかで、今回は町担当者の方に積極的に関与してもらうことも叶いませんでした。こうした問題は、準備室の努力だけで対処できることではないため、今後もどのように対応するのがよいのかは悩ましい限りです。DAを含む奥会津ミュージアムは、行政能力が低下しつつある7町村の文化遺産マネジメントを、連携によって維持向上することを目指しています。しかし、実際には文化分野に困難を抱えている町村ほど密な連携が難しいように思います。これについては、決定的な解決策はなかなか見つかりません。

写真活用法についてイベント前から準備室と情報交換し、今回のイベントを最も楽しみにしていた三島町の学芸員が、体調不良により急遽欠席となったことも残念なことでした。今回は突発的な事情による一町村の欠席ですが、実はDA構築の議論を行うにあたっては、7町村の担当者間での日程調整が慢性的に課題となっています。奥会津ミュージアムおよびDAには7町村14機関が参加しており、しかもその所在地は神奈川県と同程度の面積に広がる険しい山間地に広がっています。全ての関係者が一度に集まれる機会は少なく、貴重です。

内容面について考えてみると、柳津町の担当者が「水害でアルバムを失った家が多いため、柳津では古い写真は集まらない」と述べていたことが印象に残っています。各町村独自でこうしたイベントを開催することは、まだまだハードルの高いことだと思われるのだと改めて感じました。実際には金山町も2011年の水害で大きな被害を受けた町でしたが写真は収集できています。そして、古い写真だけが地域にとって重要な資料であるということもないのです。様々な障害があるとしても、ターゲットにする資料や地区の選び方、イベントの規模等を工夫することで、どこでも可能な

ことはあるはずですが。例えば三島町など金山町外でもこのイベントを開催して、他のところでも開催可能だということを具体的に示せると、心理的なハードルを下げていけるのかなと思います。

田中：DA構築に向けて、今後の方向性など決まっていますか？

榎本：DA構築事業全体としては、2024年度中のDAサイト公開を目指しています。まずは第一期公開資料として、奥会津ミュージアムで今年度開催した連携企画展「奥会津の縄文」関連資料約340点をDAサイト上で公開する予定です。奥会津ミュージアムの枠組みのなかで、年に一度開催が予定されている7町村連携事業展の成果を、コンスタントにDA上に公開できる体制を整えることが、まずはDAが最低限クリアすべき活動目標だと準備室は考えています。

これによって、文化遺産マネジメントの取り組み状況に差がある7町村の足並みを揃えてDA活動に参加できますし、7町村が苦勞して連携した成果を、展覧会という時間的・地理的制約に縛られた公表形態を越えて、活用することができるだろうと考えています。このことは、今までDAに馴染みのなかった関係者や地域の方々に、広くDAの意義を感じてもらう上でも有効ではないかと期待しています。なお、2024年度は連携企画展として「奥会津の冬」展が開かれることが決まっています。この展覧会では、今回のイベントで取り上げたような、冬の暮らしを写した写真も展示される予定です。これにあわせて、縄文資料の次は、今回のイベントで扱ったような写真資料のDA上での公開にも取り組みたいと考えています。

また、こうした7町村足並みを揃えてのDA活動に加えて、各町村がそれぞれの文化遺産の整理状況や活用方針に合わせて、DAサイトを資料公開・活用場として利用できるようにしたいと考えています。準備室でも、町村の支援を積極的に行いたいところです。

加えて、地域資料をめぐる情報基盤整備にも取り組みます。地域資料データの持続的な公開・活用のためには、そもそも各町村や施設内で地域資料データを適切に保存・管理できなければなりません。しかし、準備室で行ったヒアリングからは、各町村のデータ保存環境自体にも、多くの課題があることがわかってきました。文書やモノ資料の保存・管理については経験が蓄積され、きちんとしたルールが存在しているも、資料データの保存・管理については、経験が浅く、ルールや環境整備が追いついていない町村・施設は、地域レベルにおいてはまだまだ多いようです。

これに対して準備室では、DA のバックヤードあるいは収蔵庫として、7 町村共同で地域資料データを保存・管理する共同データストレージを構築することにしました。現在システムの構築とルール作りに取り組んでいます。これについては、山形大学を中心とした研究プロジェクト「地域資料データの継承とオープン化を目指した地域横断型データ共有基盤の構築」に参加し、大規模災害への対応を視野に入れた地域資料データのより広域的な保存枠組みの視点も取り入れながら、取り組みを進めています。来年度には、7 町村内での共同データストレージが稼働することに加えて、山形・仙台・金沢・奥会津と広域で地域資料データを持ち合いながら保存を目指す、地域データ共有基盤システムの実証実験がスタートする予定です。

一方、DA 準備室の運営については、まだまだ課題も多いのが実情です。今回のイベントのように公開講座を開いて、関係者間での共通認識の醸成には務めています。DA の基本知識や利用経験については学芸員等の文化担当者間でも大きな開きがあり、議論を進めるうえで常に難しさを感じています。その困難に、先程お話ししたような、関係者が集う機会の乏しさが追い打ちをかけてきます。これについては、オンラインでの参加方法の充実と、事後の資料公開や共有を通じて乗り切ろうとしています。しかし準備室側の事情によっても、対応に難しさを感じている場面が多々あります。例えば、第 1 回の公開講座の内容はすでに公開 (<https://okuaizu.design/okuaizu-da-junbi/1806/>) していますが、8 月に実施した第 2 回の公開講座の内容は、準備室に余力がなく、荒い文字起こしまで一度作業が中断しており、現在まで公開できずにいます。また、組織内でのセキュリティ上の制約が非常に厳しく、オンライン参加の環境を用意しても、利用が困難な機関が 7 町村内に今なお存在するなど、各町村の事情全てに対応するのが困難な状況が続いています。

そうした状況を踏まえて言えば、今回のイベントに

ついては、会場でアプリケーションを用いて作成したホワイトボードの内容と、会場でリアルタイムに作成していた聞き取りメモを簡単に整理したファイル、当日参加者のおひとりが提供してくださった写真のデータを、イベント直後に 7 町村関係者内で共有することができました。これが早期にできたのは、実験的とはいえ、可能などころから情報技術を活かした形でイベントを開催しようと試みた結果であったかと思っています。会場での会話を整理して奥会津ミュージアムのウェブサイトに掲載することも予定していますが、こちらについてはやはりある程度手をかけた編集と検討を行う必要があるので、少し時間をいただくことになると思います。

今後は、まずは 7 町村内で共有したファイルを検討材料にしながら、次回のイベントの検討を進める予定です。今回のような写真を使ったイベントについては、次回は来年度の開催を考えています。開催地としては、先に挙げた三島町から積極的な反応が帰ってきています。三島町は今回のイベントは欠席でしたが、イベントの成果と意義は共有できたのかなという気がしています

田中：今後の DA 構築に向けて、ご活躍を期待しています。ありがとうございました。

榎本：ありがとうございました。

引用文献

- i 「奥会津の冬」を描こう！ 奥会津デジタルアーカイブ準備室だより号外 2023.10.23 .
<https://okuaizu.design/okuaizu-da-junbi/2175/>
- ii 榎本千賀子, 櫻澤孝祐 (2023) . 過疎地域における広域自治体連携とデジタルアーカイブ構想—奥会津デジタルアーカイブ構想の現状と課題—. 創生ジャーナル Human and Society, 6.59-70.

写真 1 古い写真を見ながら、その当時の話を語り合う（著者撮影）



写真 2 それぞれの写真に当時の状況や思い出話を記入した付せんを貼る

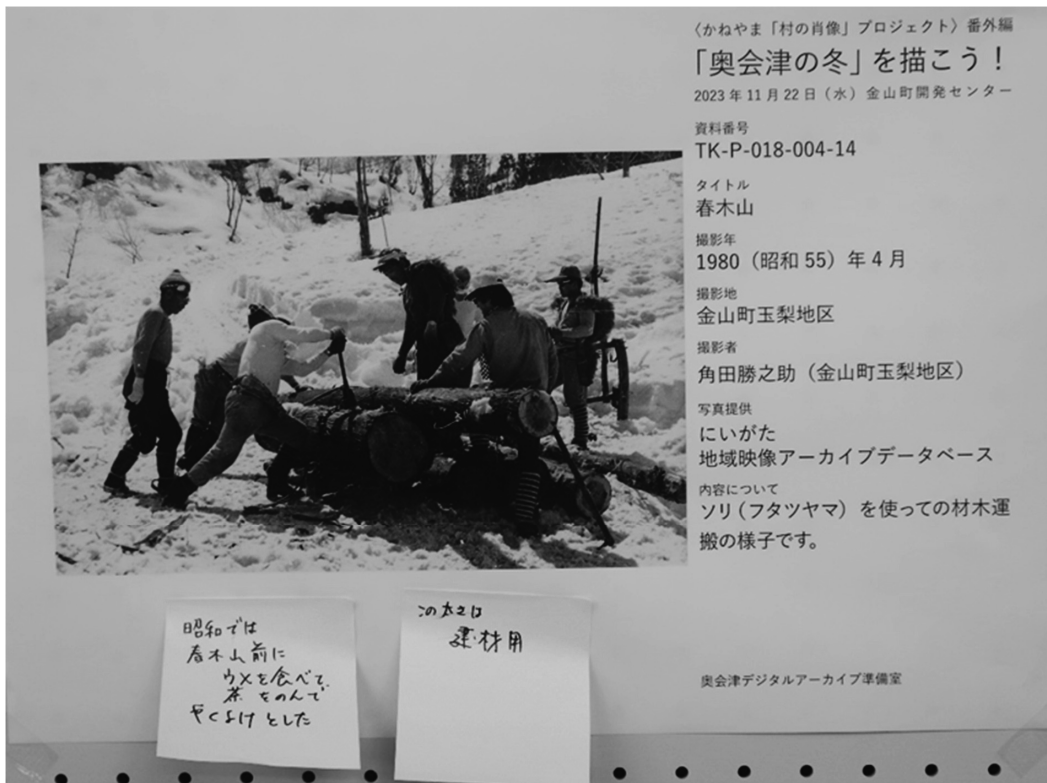


写真 1・2 に関する説明

イベントの冒頭では、プリントアウトによる写真展示を見ながら、参加者同士で自由に会話してもらった。参加者が写真を閲覧しながら語り合った思い出は、スタッフがその場で付箋に書きとめ、写真に貼り付けていった。これは、NPO 法人 20 世紀アーカイブによる「どこコレ？ - おしえてください昭和のセンダイ -」

(<https://www.smt.jp/projects/doko/>) を参考に 〈かねやま「村の肖像」プロジェクト〉 で以前から採用している方法である。

写真3 デジタル化した写真をモニターで拡大し、詳細を確認する（著者撮影）



写真3に関する説明

モニターに写した写真の元サイズは64×47mmであるが、高精細スキャニングによるデジタル化後は大きく拡大しての検討が可能となる。写真3の場面では、民家の壁に掛けられた保存食の写真を拡大して参加者と検討し、写真に写った保存食として、大根・大根葉（糧飯用）・トオシグリ（栗）・トオシガキ（串刺しにした干し柿）等を確認することができた。また、トオシガキがかつてはお歳暮の贈答品となっていたという参加者の記憶を引き出すことができた。